

自分が外から帰ったことを知らせる声かけは、どうにも照れくさい。

しかし、宿屋で休む仲間を驚かせたくなかった。トライヨラ特有の開放的な場所で休む彼——アルフィノの邪魔をしたくない。

一人一棟の水上コテージを連王たちから貸し与えられたはずが、宿屋側の手違いでアリゼーの部屋がないことに気付いたのは数時間前。悩みの多い若者を家族だから、という理由でアルフィノと同じ棟にするのは気が引ける。暁の知略担当者たち（俺と相棒は含まれていない）はそう結論づけ、アリゼーはアルフィノの棟に、アルフィノは俺と同じ棟になった。

彼とは気兼ねない関係だ。男同士だし、気にすることはほとんどない。互いの荷物を部屋に置くと「夕飯まで各々自由に過ごそう」という提案をされた。二つ返事で受け入れる。彼は資料をテーブルに並べて整理をしはじめたので、俺はマーケットに向かった。

街中では人の多さと色の鮮やかさに目がちかちかする。旅をするときよく起きる現象だ。なるべく遠くの空を眺めながら歩いた。晴れた空は、体の感覚を調弦するのに最適だ。

マーケットで目当ての品を購入する。装備の手入れに使う消耗品や携帯食料、薬、包帯など。少し早いが、ゆっくりと街の中を歩き、帰った後は装備の手入れをすれぱちようど夕飯の時間になるはずだ。

街中を一回りして宿屋に戻る。「帰った」と照れくさい声かけをすると「うーん」という気の抜けた声が返ってきた。購入した品物をベッドの脇に置いて、アルフィノはソファに寝そべったまま資料から目を離さない。

俺と二人きりのときの彼は、ときどきこうして自らの思考に没頭する。それを不遜とは思わない。まだ薪の拾い方さえ知らなかった彼を思うと大きな変化だ。あの頃の彼が俺と同じ部屋で寝泊まりしていたら、気を張ってまともに休めなかっただろう。今の彼は、俺と同じ目線で物を見る「仲間」だ。

水分補給としてサーブスで用意されたフルーツを手取る。みずみずしいりんごを二つ持って、アルフィノが寝そべるソファの隣に座った。それでも彼は目線を資料から俺に向けていない。所狭しとテーブルに並べられた石板や文献の端にりんごを一つ置く。もう一つはそのままかじりついた。しゃくつと水分と甘みが弾ける音がする。

「少しは休めたか？」

「うん……ちよつとは」

上の空の返事は休めていない証拠だ。没頭する彼の言葉はどこか幼い。気を許した者への振る舞いだ。思わず笑みがこぼれる。これは「気を許された者」として早急に彼を休ませなければならない。

りんごを口に咥えてブーツを脱ぎ、彼と同じようにソファに寝そべる。ぎし、と体の下でソファが不満気な音を立てたが気にせず寛いだ。りんごを頬張りながら、経験を重ねた細い足の下へ自分の足を振じ込む。彼は突然の触れ合いに驚くことなく、俺の足をオットマン代わりにして自らの足を乗せた。そして、体勢を変えたと再び青い瞳は資料を追う——が、徐々に白いまぶたが落ちはじめ。その様子を眺めながら食すりんごは先ほどより甘い。

自分の足の上に足を乗せられても構わない。そう思える相手はあどけない様子で夢の中へ落ちていく。俺がこんな風に甘やかしたいと思う存在は、この世に彼しかない。

《完》

世界で君だけ

TM28 缶バッジペーパー Web再録

ピンクガーデニア / @krkd_ff14

The One and Only You!